

出生体重1000g未満児の catch up growth の時期について

(分担研究：新生児・乳児の栄養管理に関する研究)

研究協力者 和田 義 郎

共同研究者 鈴木 重 澄

要 約：出生体重1000g未満の超未熟児で長期生存し経過を追えた33例の半年毎の身長、体重、頭囲、胸囲の計測値より、catch up growthを各計測値が $-2SD$ を超えた年齢(暦年齢および修正年齢)とし、男女別およびSFD、AFD別に検討した。各身体計測値は暦年齢においては2才半まで、修正年齢では1才半までには $-2SD$ に達することが示され、乳児期の急激な増加は、栄養との関係が重要であると思われた。

見出し語：超未熟児、catch up growth

はじめに：出生体重1000g未満の超未熟児の死亡率低下に伴い、家族の関心事は生命予後よりも児の発育、発達へと変化して来ている。そこで我々は、超未熟児の catch up growthの時期を経年の身体測定値から、 $-2SD$ に達するか超える暦年齢、修正年齢で検討した。これらを新生児・乳児期の生活管理、とくに発育と栄養管理面との関係で研究する上での基礎データとするのが目的である。

対象および方法 対象は1975年から1984年の10年間に名古屋市立大学病院NICUに入院した先天奇形児を除く出生体重1000g未満児で長期生存し、経過を追えた33例である。男児は13例、女児は20例であり、仁志田の胎内発育曲線

よりみたSFD児は男女それぞれ6例であった。平均在胎は27週(24~32.8週)、平均出生体重は826g(620~965g)、平均出生身長は34.1cm(31.4~37cm)、平均出生頭囲は23.5cm(21.8~25.5cm)、平均出生胸囲は20.4cm(18.3~21.8cm)であった。身長と体重においては、暦年齢半年毎の計測値の平均と標準偏差値を男女別で、昭和55年度厚生省報告の身体発育値と比較した。また、身長、体重、頭囲、胸囲が $-2SD$ を超える年齢を、暦年齢および修正年齢において算出した。

成 績：男女別暦年齢半年毎の身長および体重平均標準偏差値は図に示した。身長において、男児では暦年齢1才から1才半の間に平均値が

-2SDを超え、女兒においては2才頃に平均値が-2SDに達している。体重は男女とも2才頃平均値が-2SDに達している。

一方、各身体計測値が-2SDに達した暦年齢および修正年齢を男女別、SFD、AFD別にみたのが表である。男女ともSFD、AFD間に-2SDに達した暦年齢および修正年齢の差は例数が少なく認められなかった。暦年齢では各身体計測値は2才半までには、また、修正年齢では1才半までに-2SDに達することが示唆された。

考察：早期に出生し、胎内と同じ発育は望めない超未熟児は、重篤な呼吸障害等のため、修正在胎40週時の身体発育値が正常成熟新生児の出生時身体計測値よりもかなり低値であることは、とりもおさず、胎内と出生後の主として栄養の差によるものであろう。今回の成績は、超未熟児においては暦年齢6カ月時の各身体計測値は低値であり乳児期の増加が著しく、この時期の栄養がcatch up growthに重要であろうことを示唆するものである。

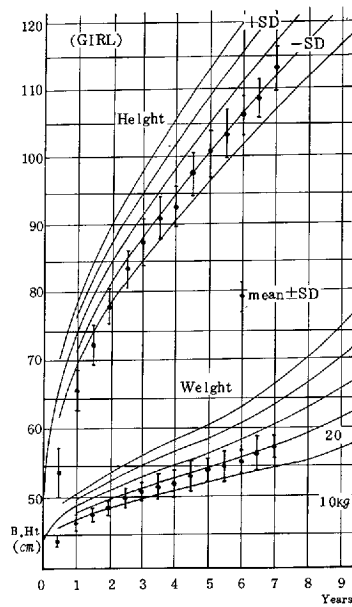
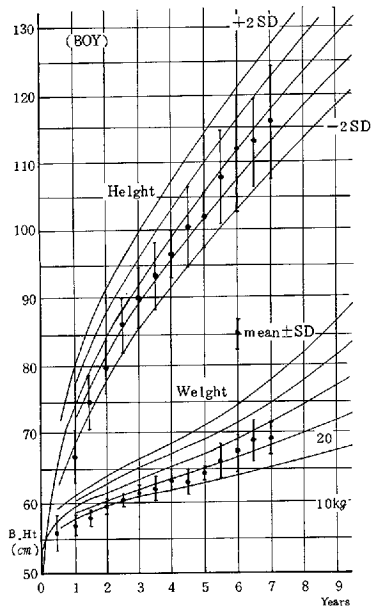


表 -2SDに達した年齢(平均 S D)

	暦 年 齢				修 正 年 齢			
	身長	体重	頭 囲	胸 囲	身長	体重	頭 囲	胸 囲
男	1.69 ± 0.9	1.98 ± 0.8	1.27 ± 0.4	1.35 ± 1.0	0.94 ± 0.7	0.89 ± 0.5	0.92 ± 1.0	0.71 ± 0.4
SFD	1.93 ± 1.5	2.45 ± 0.8	1.42 ± 0.4	2 ± 1.8	1.23 ± 1.2	1.27 ± 0.5	1.17 ± 1.4	0.85 ± 0.6
児 AFD	1.59 ± 0.7	1.6 ± 0.6	1.14 ± 0.5	1.07 ± 0.2	0.77 ± 0.4	0.66 ± 0.3	0.7 ± 0.6	0.63 ± 0.2
女	2.2 ± 1.0	2.35 ± 1.9	1.27 ± 0.7	1.8 ± 1.9	1.12 ± 0.7	1.18 ± 1.0	0.64 ± 0.6	1.19 ± 1.8
SFD	2.48 ± 1.3	2.25 ± 1.7	1.83 ± 1.0	1.4 ± 0.2	1.5 ± 0.8	1.42 ± 0.9	0.75 ± 0.4	0.9 ± 0.4
児 AFD	2.09 ± 0.9	2.4 ± 2.1	1.08 ± 0.5	2 ± 2.3	0.96 ± 0.6	1.07 ± 1.1	0.6 ± 0.7	1.32 ± 2.1

(1975年~1984年 出生体重<1000g 名古屋市立大学病院NICU入院)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約: 出生体重 1000g 未満の超未熟児で長期生存し経過を追えた 33 例の半年毎の身長、体重、頭囲、胸囲の計測値より、catch up growth を各計測値が $-2SD$ を超えた年齢(暦年齢および修正年齢)とし、男女別および SFD、AFD 別に検討した。各身体計測値は暦年齢においては 2 才半まで、修正年齢では 1 才半までには $-2SD$ に達することが示され、乳児期の急激な増加は、栄養との関係が重要であると思われた。